



文章の書き方

自分の内面と向き合い、心のままに偽ることなく書く、そこに真実があり、人間がある——それを
独り言に終わらせないために、文章が整えられる。

主題と呼ばれる主体的真実を、正しく伝えるために

構想が必要であり、適切に美しく表現するために

叙述が工夫されるのである。構想は真に近づくための方法であり、叙述は美に近づく手段である、といえよう。

視野の広さと体験の深化、最適一語の条件、明晰さの条件など自己表現としての文章の底流をなす心構えと方法を、丹念に

検討しつつ、自分にふさわしい

尾川正二

“名文”を綴る道すじを示す。

文章の書き方

昭和五七年五月二〇日第一刷発行

定価——四二〇円

著者——尾川正二

©Masatsugu Ogawa 1982 Printed in Japan



発行者——加藤勝久 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三—三 郵便番号二三 電話〇三—九四三—二二 振替東京八—三三〇

装幀者——杉浦康平十海保透

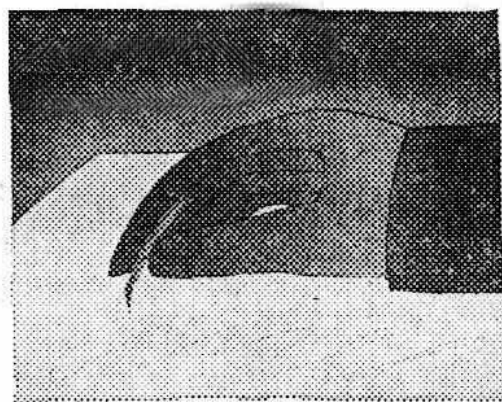
印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

ISBN 4-06-145654-7

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。(学1)

尾川正二



章の書き方

講談社現代新書

●目次

まえがき 4

第1章―主題・構想・叙述…………… 11

第2章―何を書くか―考えぬいた主張を明晰に…………… 31

1―書き出し 32

2―引き合う力 48

3―主語の省略 67

4―放胆文から小心文へ 81

第3章―どう書くか―一語の選択…………… 89

1―文体 90

2―一語の選択 105

3 — 中止法 119

4 — ねじれ文 124

5 — 二本のペン 129

6 — 句読点 142

7 — 誤字・誤用 151

第4章 — 書くことの基本 — 「ところ」の表現…………… 167

1 — 発想 168

2 — 「みる」ということ 188

3 — 誠実ということ 195

あとがき 203

まえがき

「国語表現論」「日本語表現法」「論文指導」などの題目のもとに、学生諸君の文章を読みつづけてきた。そのうち、「論文指導」という講座は、発足以来二年めにはいったところで、はっきりとしたレポートをまとめる段階にいたっていない。「大学挙げての文章指導」ともいうべきこの試みは、確実に、その波紋をひろげてゆくことであろう。それぞれ専門の違う教師の論文指導の成果が期待される。論理的思考の展開が眼目だからである。

顧みて、みずからはそういう実際の指導を受けたことのないものばかりである。先学の論文を読みながら、自然に学び取ってきた、というのが実感であろう。それぞれ、実践経過をプリントし、情報の交換をくりかえしながら進めていった。「自分の文章の調子に近づけようとするところがあるように思われ、恐ろしくなる」という述懐は、文章指導に当たるものの切実な声として響くものがあつた。真剣になればなるほど、そういう反省がつきまといってくる。

学生の文章がおかしくなった、文章が書けなくなった、という声は、かなり高くなっている。読書をしない、漫画しか読まない、そんな学生が増えてきている今日、文章力が低下する

のは当然のことだという因果論も、聞こえてくる。「だめになった」と言うばかりでは、どうしようもない。とにかく、文章を書くという、基本のところから始めてみよう、そこから、文章意識も芽生えてくるはずである。書くことをつづける、添削して返す、その反復が、むだに終わるはずがない、という信念による試みである。

「表現論」は、やがて二十年になろうとする。「小論文」に重点をおきながら、いろいろな種類の文章に及んでいる。近代にはいっても、『国語の力』（垣内松三）を初めとして、文章の分類が試みられてきた。記事文・叙事文は、「もの」をみる文章、説明文・議論文・抒情文は、「ところ」をみる文章とされている。そのほか、感想文・随筆文・紀行文・書簡文・日記文などが加えられる。「ところ」の内か外か、ということになる。

実際に書くときには、機械的な分類を超えて、さまざまな形の文章が融合されるが、「論文指導」は、議論文に集中していく。「表現論」の時間のほうが、自由である。それだけ、おもしろい文章に接することができる。たとえば、俳句を題にすると、詩的想像の世界を自在に描き出して見せる。イメージの多様さである。

文章の三本柱とされる主題・構想・叙述のうち、叙述で読ませる文章の形態において、すぐれたものが見られる。叙述を主とする伝統は、今日にも受けつがれている。「建てることを学

ぶ前に、飾ることを学んでしまう」(アラン)とところがある。正しく、美しく、を意図するかぎり、それも当然のことであろう。身ぶりや表情や声の抑揚やリズムによって具体化される話したことばとは違う。空間に、しかと据えられる堅固さが、書きことばには要求されるからである。

言うべきこと(主題)がなければ、文章とはならない。言うべきことがありながら書けないところから、文章の問題は始まる。単語が集まって、文となる。文の集合が、段落となる。段落の有機的な脈絡が、文章という全体を構成する。そういう基本の知識をもちながら、実際に書くとなると、叙述にひきずられる。ひきずられないための構想である。構想の枠のなかで、叙述の工夫も生きてくる。

文章は、要することばの配列である。数式の立て方にも美しさがある、という。むだや回り道のない展開には、おのずから美しさが伴うということであろう。抽象的な論理構造の世界でもそうであるならば、ことばのリズムをもつ文章表現となると、なおさらのことである。

きれいに泳いでいるような文章がある。浮いたまま、流れに漂っているものもある。浮きつ沈みつ、あがきつづけているようなものもある。必要以上に力を入れると沈んでしまう。力みが、自然の浮力を失わせるのである。窮屈な表現になったり、ぐるぐる回りを始めたりする。浮い

たまま、自分の手足を動かす努力を怠ると、個性を失って、文章も流れてしまう。自分以外のものにまかせて漂っている、という主体のない文章となる。内に力がこもっていて、騒がない、それが、自然な文章の展開となるのである。

「内に力がこもっている」とは、誠実なところであり、柔軟な思考であり、鋭い感覚のことである。「論高うして、かえって誠なし」(旅寝論)では、空しい。「心の作はよし、詞の作好むべからず」(三冊子)といわれるゆえんである。

そよ風が、ちぎれて蝶となるのです。(松井勲)

海には雲が、雲には地球が映っているね。(三好達治)

わたつみのそこゆくをのひれにさへひびけこのかねのりのみために(会津八一)

賀辞には必ず愁声あり。弔辞には必ず歓声あり。(正眼国師逸事状)

こうした鋭い一行は、みな内側の充溢から流露したものである。それは、生きていくこと、深くかわる。生きているとは、平凡とも見られる日常を大切にすることである。人生の細部に目を注ぐとき、その瑣末なものの意味に気づくはずである。瑣末なものの累積を、人生と名づけている。

細部を掬い取った文章に、生きたものがある。「流れに漂う」文章は、かいなでの総括的なことばの羅列に終わる。粗雑であり、大味にすぎる。普遍性をもつように見えながら、脱落するものが多い。現実には、複雑に分化し、重層している。総括的なことばで包みこむことはできない。現実の重層性に気づくならば、新しい視点の発見が必要となる。積極的な精神の緊張が要求される。それが、細部の意味である。

書くことは、容易なわざではない。「筆の音に淋しさと云ふ意味を感じた朝も昼も晩もあつた」(漱石)という。「腸をしぼる」と芭蕉は言っている。文章を書くことが、いっそう困難な時代である。かつて、美しい人類の夢であった進歩とか文明とかが、無条件に肯定できなくなってきた。人類の築いてきた文明そのものへの深刻な懷疑にさらされている。機械文明を中心とした社会的現実には、激しく動いている。それに対応すべき人間の支柱は定まらない。内と外との不均衡な状態にさらされている。情報は、あふれている。受け取るというよりも、情

報のなかに身を浸しているのである。自由な主体性を取り戻すことも、容易ではない。対立・矛盾・不信・不安・崩壊などの語が、原稿用紙にも浮かび出ている。価値の崩壊、様式の欠如、現代という時代の捕らえ難さは、学生能力を超えてもいる。

内に上昇を志向するものがある。それを外から規制するものが、言語体系である。その二つの均衡が、文章表現には要求される。内にあふれるものを大事にしながら、形を整える。それが、論理の構造であり、文体である。素朴な表現も心を打つ。精妙な表現も心に響く。いずれも、こころの高い緊張度をもつからである。

第1章——主題・構想・叙述

る。そうして各自の**固有**のものが、文章として
定着するものである。その言うべきことが、
言うには、話すものかどうか、**吟味**すれば、け
れば、なるまい。既に言ひ尽くされていふこと、
いはば常識になつていふことと、いかに整然
と力説してみても、訴ふる力はもち之ないか

表現における眞実と美

文章表現は、要するに「何をどう書くか」ということに尽きる。「何」が主題であり、「どう書くか」は、構想と叙述の問題になる。「主題が構想を生み、構想が叙述を決定させる立体的な展開過程」（西尾実『人間とことばと文学と』）が表現である、と要約される。主題と呼ばれる主體的なもの、構想という主體的活動、それを客観的な言語として叙述に定着させる、それが表現活動である。言うべき何かがある、それを、どう言語化するか、ということである。

まず、その「何」をはっきりさせることが、前提となる。「作品を展開させる原理となり、原動力となる主體的眞実」が、主題である。その自分の言いたいことを正しく伝えるために、構想が必要になる。それを、適切に美しく表現するために、叙述が工夫されるのである。したがって、構想は、眞に近づくための方法であり、叙述は美に近づく手段であるといえよう。この二つは、同時に考えられる。美は、眞に近づく手段であり、眞は、美のなかから輝き出るものだからである。アランは、「美しいがゆえに、どっかと据えられている思想がある」（『文学論集』）と言う。美しいものは、考えることをうながすものでもある。

一語一語が積み重ねられ、一文となる。一文一文が有機的につながりながら、一段落を構成する。各段落が、主題に向けて構築される。そうして各自の固有のものが、文章として定着す

るのである。その言うべきことが、言うに価するものかどうか、吟味されなければならない。既に言い尽くされていること、いわば常識になっていることを、いかに整然と力説してみても、訴える力はもちえないからである。

『戯作三昧』（芥川龍之介）に、創作にあたってのこころの動きが描かれている。頭のなかに、光の靄もやのようなものが流れ出したという。「光の靄」「かすかな光」「神来しんらいの興」「星を砕いたようなもの」「空を走る銀河」などと形容している。これは、主題の設定、それを支える小主題の設定、さらには叙述にまで及んで言えることであろう。

全体のための部分、思想の秩序づけのための段階が、段落構成の意味である。二百字前後の段落が、いちばん読みやすいとされている。その段落のなかに、眼目となる小主題を据えてゆくと、論旨がはっきり見通せる。逆に言えば、主題のための、いくつかの要点を解説するため、約二百字を費やすということである。そうすると、長文やねじれ文も避けられよう。一文平均三十〜四十五字という基準も、簡潔な文の条件として算出されたものである。簡潔な文は、明晰さにつながり、おのずから筆力を生み出す効果をもつ。

信なる情と巧みなる辞

小論文の課題に、「思想よりも、構想力、表現力をみる」と注記されていることがあるのも、主題・構想・叙述の問題を指摘しているのである。「構想力」を重視するのは、この三つの柱のうち、もっとも弱いとされているからである。日本文学の伝統は、叙述の美しさにあるといえよう。紫式部から川端康成にいたるまで、構想よりも叙述に特色があった。中世の戦記文学に及んで、戦いの発端・経過・結末という推移から、構成的になっているのは、むしろ必然の成り行きといえよう。叙述に力点をおくと、全体の構成がゆるみ、叙情的にもなってしまう。そういうことから、日本語は論理的でない、という批判を生み出したことも考えられる。

あらためて、構想力が問われるのも、叙述を主とした歴史的背景への反省とみられよう。構想力の欠如を、日本語の非論理性とするのは、筋違いである。日本語そのものが、論理に堪えられぬものであるならば、論理学も成り立たぬはずである。ウォーフが、一つの普遍妥当な論理学というものはなく、いつも特殊な言語を媒介とした論理学があるだけだ、と言っているのは、示唆に富む。文構造の深みに分け入ったことばといえよう。

高校で学ぶ漢文の論理的な構成は、身近な参考となろう。力と論理で押し通してきた中国の

長い伝統は、散文構成についての多様な方法論を考え出している。『文心雕龍』(中国六朝時代の文学評論書。作者は劉勰りゆうききやう)に、孔子の「情は信ならんことを欲し、辞は巧みならんことを欲す」ということばを引いて、「志足りて言に文あやあり、情信にして辞に巧みなる」のを、文章表現の最高のものとしている。志(主題)が信実であって、言辞(叙述)が美しく巧みであれという。達意のための文飾である。それは、「美は、真に向かう靈妙な道しるべである」(カンディンスキイ)ということになろう。その「道しるべ」を載せてゆくものが、構想である。

古典の構成美

漢文に構成を学ぶ利点は、短い文章のなかで、展開の鮮やかさを具体的にみることができるところにある。構成と簡潔な表現と、今日に生かすべき多くのものを含んでいる。「單綴の孤立語であることによって生まれる簡潔による明快、あるいは簡潔なるがゆえの暗示」(吉川幸次郎『中国文学入門』)も、自分の文章を映してみる鏡となろう。

日本の古典でも、教科書に採られている『平家物語』や『徒然草』など、構想のうえからも見過ごせない作品は多い。細部の叙述に気をとられて、大きく全体をみる余裕を失うのが、古典学習の一般の傾向であろう。文章展開に眼を向けると、大きな視点から、しだいに焦点を絞